

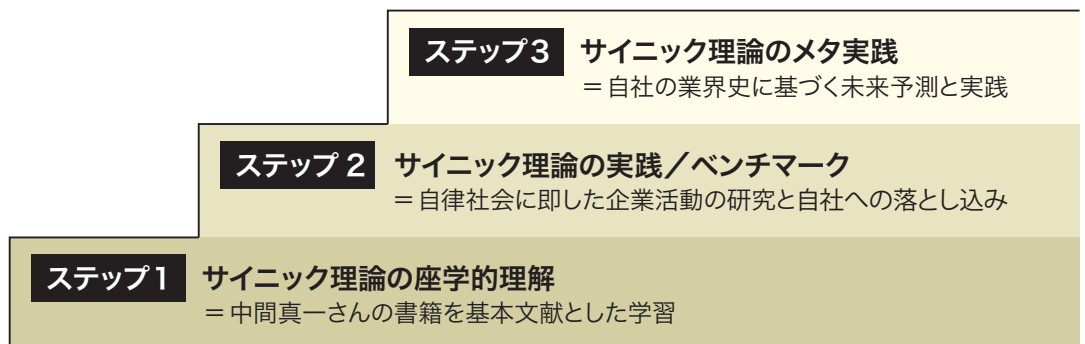
関係各位

株式会社青い街  
杉岡一樹



## サイニック理論 メタ実践プログラム

- **企画の趣旨** サイニック理論を**実践的に伝播**させることで、より善い社会をつくと共に企業活動の新しい可能性を提示すること。
- **企画の要点** 実践誘導における最重要ポイントは「**課題を自分ごとにしてもらう**」仕掛けです。どれだけ論理的な理解が深まっても、自分ごとの感覚が弱いと人は動きません。その点に関して言えば、理論の精密さは諸刃の剣になります。自分ごとの感覚は、自分で調べたり考えたりした経験量に比例するからです。本企画は、論理的な理解と実践の先にメタ実践 (=再創造) プログラムを置くことで、「**自分ごと**」意識の誘発をめざします。



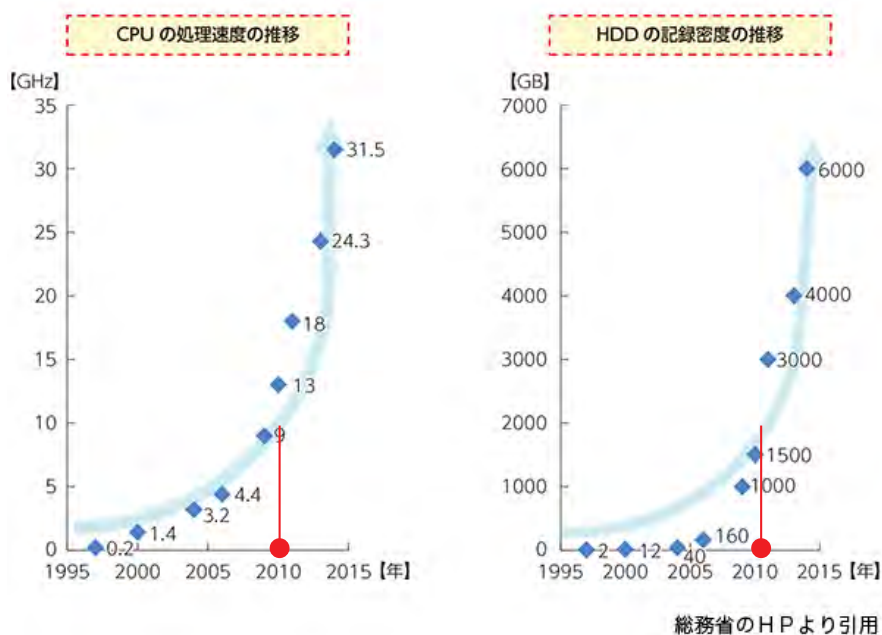
以上のコンセプトに基づき、本企画書には3章の解説セクションを設けました。

- 1** 社会の要請とサイニック理論の合致 ..... P.2
- 2** メタ実践プログラムの詳細 ..... P.7
- 3** 運営フロー ..... P.10

# 1 社会の要請とサイニク理論の合致

いつの時代にも「先が見えない」という表現は使われるものですが、2010年頃にコンピューターの性能が指数関数のニーポイントを曲がってからは、本当に予測が難しい時代になっています。

具体的には、AIの急速な発達やメタバース空間の膨大な広がりにより、「最新技術の全体像を把握している人はいない」と言われているのが実情です。



かかる時代において、サイニク理論は希望の光となります。

何故なら、それは単純な未来予測ではなく、未来について考える思考の道筋をも示してくれるからです。

※ 以下の文章は、noteにも掲載しています

[https://note.com/k\\_sugioka/n/n74d5bbd2c955](https://note.com/k_sugioka/n/n74d5bbd2c955)



## サイニク理論の3つの特徴

1970年（つまり、今から50年ほど前）、オムロンの創業者である立石一真さんによって発表されたこの理論は、以後60年の展開を示した『未来の羅針盤』です。

オムロン自体がこの理論をベースに発展した企業ですから、言わば『精度が実証された理論』と言えます。

2022年に、中間真一さんの同名書籍が発売されたことも、耳目を集めるきっかけになりました。



理論の具体的な内容は上記の著作にゆずるとして、ここでは、『サイニク理論』の3つの特徴について記します。

その3つとは……

- 1：独自視点による歴史研究
- 2：歴史の周期性への着目
- 3：未来予測への段階設定／活用法

です。

以下、それぞれについて、詳しく解説します。

### 1：独自視点による歴史研究

「歴史」と聞いて多くの方が思い浮かべるのは『権力者の交代による時代区分』だと思います。

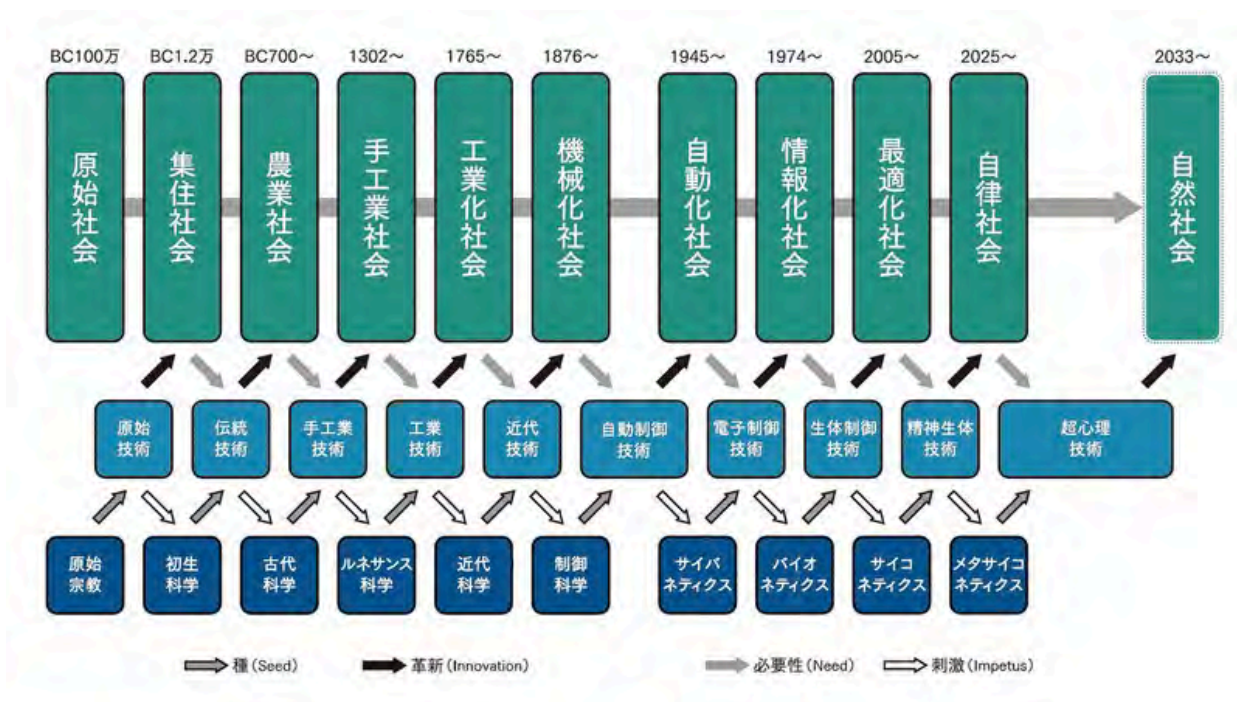
これは学校教育がそうになっているからですが、『安土桃山時代』と『江戸時代』を分ける根拠は「誰がもっとも強い武力や政治力を持っていたか？」。

もちろん、それはそれで興味をそそるアプローチではあるものの、疎外感も小さくありません。

何故なら、織田信長も徳川家康も、わたしたちには直接つながっていないからです。

一方、サイニク理論では『技術の発展』を歴史区分に採用しました。

これは、提唱者の立石一馬さんが技術者だったからでもありますが、その区分は歴史の親近感をグッと上げてくれます。



たとえば、1765 年から『工業化社会』が始まるのは、ジェームズ・ワットが『蒸気機関』を発明したからです。

それまで人間や動物、あるいは水や風のような『自然の力』が動力だったのに対し、『熱が力に変わる』の発見によって社会は次のステップに進みました。

『手工業』の『手=人間』から『機械』へと、生産工程のポイントが移ったわけです。

この時代区分には大きな『実感』が伴います。

わたしたちは、今でも熱を動力として暮らしており、歴史の恩恵を直接的に受けているからです。

つまり、権力者の『交代』による歴史観が断絶的なものに対して、技術の『蓄積』による歴史観は連続的であり、リアリティーが途切れません。

さらに言えば、この歴史観は自然に先人への『感謝』も呼び起こしてくれます。

そうした独自視点の歴史の深掘りが、『サイニク理論』の大きな土台であり、確固とした視座なのです。



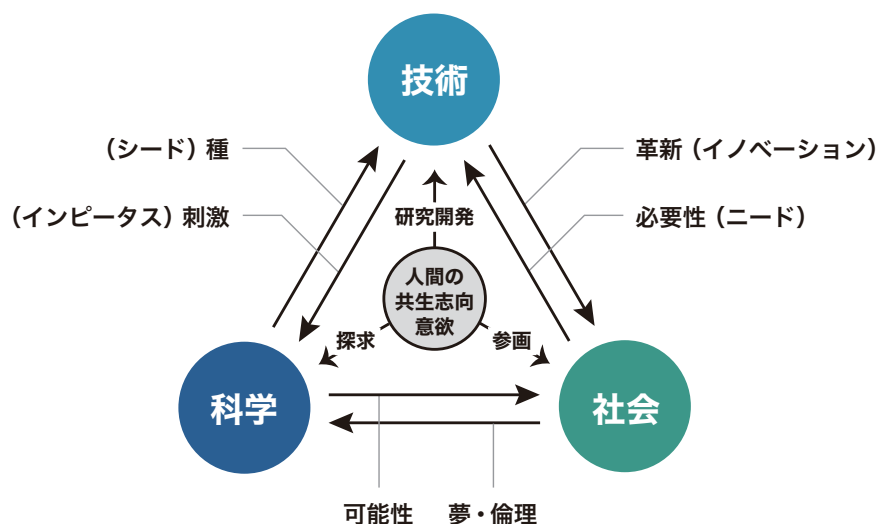
ワットの蒸気機関

## 2：歴史の周期性への着目

一方、未来予測に関しても、サイニク理論には大きな特徴があります。

多くの未来予測が『新しい技術の発見』を求め、直線的な進歩イメージを取りがちなのに対して、サイニク理論は『周期性』に着目しています。

それが名称『Seed-Innovation to Need-Impetus Cyclic Evolution / 科学が技術の種となり、社会が技術にニーズを与える、円環的な技術革新の進化』に表れる『Cyclic / 円環的』という現象への着目です。



直線的な未来予測は、どうしても『情報の獲得競争』になりますが、それだけでは『発想の飛躍』はなかなか起こせません。サイニク理論も新しい技術情報を取り入れましたが、それだけでなく、『歴史は繰り返す』という円環的な歴史観を持ったからこそ、想像力を羽ばたかせることができたのです。いささか逆説的な現象ですが、『知らないことは、考えられません』。

その特徴を理解するには、美術史がかっこの例題になってくれます。

直線的な発達史としてだけ美術史を考えた場合には、印象派からシュールレアリスム(超現実主義)への飛躍はなんだかよくわかりません。

そこに、どんな意図や論理の変化があるのか……

しかし、美術史家のクルティウスが指摘した「ヨーロッパの芸術は明るさと暗さを交互に繰り返す(厳密には古典主義とマニエリスムを繰り返す)」という特徴を踏まえると、出てきた揺れを「あっ、あれか」と感じることができます。

ここでもまた、サイニク理論の特徴は『リアリティー』です。現象の新しさだけに着目すると、理解のアプローチはどうしても恐る恐るになりますが、歴史の繰り返しに着目すると、未来に『懐かしさ』が生まれます。

円環性への着目は、『未来に対する親近感の利用』と言えるでしょう。

### 3：未来予測への段階設定／活用法

3番目の特徴は、実践への落とし込みです。

サイニク理論では、1970年に60年先の未来を予測しましたが、オムロン(というか、立石さん)は『60年後の未来を一気に先取りすること』はしませんでした。

60年後の未来をイメージしつつ、「では、30年後はどうなっているのか?」「5年後はどうなっているのか?」という落とし込みをされたのです。

それが、サイニク理論が『SF/Science Fiction』ではなく、ビジネスの実践理論である由縁。

具体例で言えば、研究段階で『人間が運転しなくてもいい、自動運転の車』という未来イメージはできていました。

しかし、それを(マンガや映画で)いきなりつくるのが『SF』。

注：SFはSFで楽しいものです



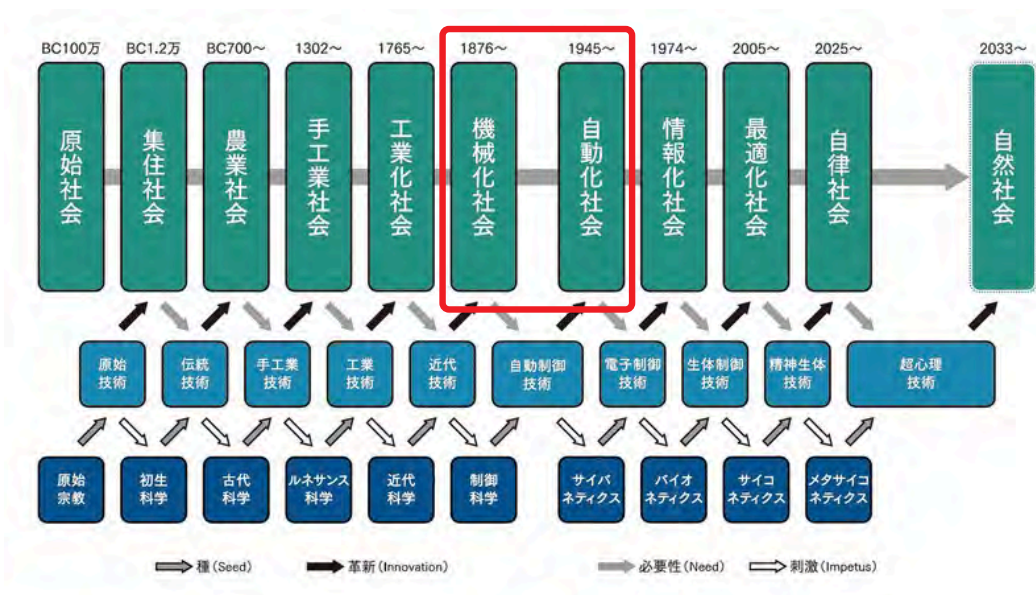
明るいモネから暗いダリへの変化は  
明るいラファエロから  
暗いエル・グレコへの変化に似ている



一方、「そこにいくまでには段階がある」と考えるのがビジネス的な未来予測であり、現実的に必要とされるのは『人間が運転する車の事故をなくすための機械=信号の自動切り替え装置』でした。

あるいは、「いずれはキャッシュレス時代になるが、その前には物理的なお金を自動的に扱う機械=ATMが必要」といった具合です。

一般的にはオムロンは体温計や血圧計で知られてますが、企業としての発展の礎は上記のような自動制御機群の開発でした。冒頭かかげた時代区分では、『機械化社会』の後は『自動化社会』と設定されています。



サイニク理論は、今後ますます世の中に広まっていくことでしょう。

そして、その未来予測を活用することが直接的な『実践』だとするならば、以上の3つの特徴をトレースして自社独自の『サイニク理論 (にあたる未来予測)』をつくり出す活動は『メタ実践』と言えます。

その場合の具体的な手順は以下の通りです。

- 1：自社の業態の歴史研究
- 2：そこにはどんな周期性が見出せるのか？
- 3：理想的な未来のからの逆算的段階設定

『実践』と『メタ実践』の違い、および具体的な実施内容を、次セクションで解説します。

## 2 メタ実践プログラムの詳細

良い文化を持つ企業を見学し、その特徴を自社に取り組むことを「ベンチマーク」と言います。

理論の学習を踏まえたベンチマークは、一般的に『実践』と呼ばれる、オーソドックスな発展手法です。

ただし、その方法にはいくつかの課題もあります。

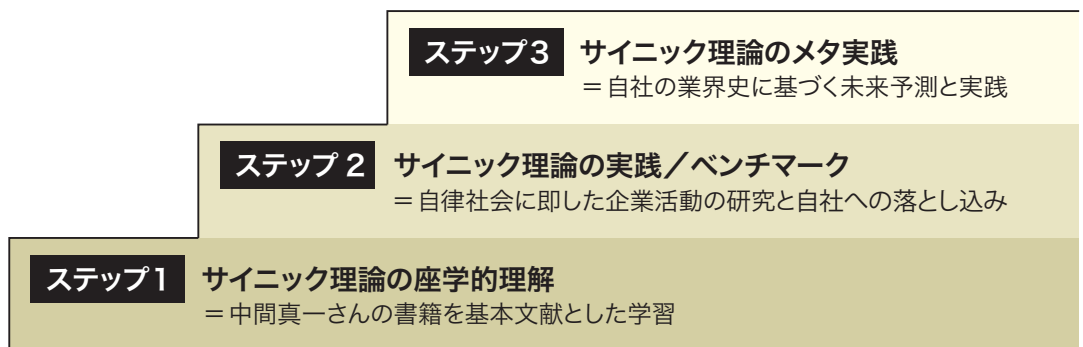
たとえば、『他社の優れた文化』という種をまいても、それを育てる土壌＝社風がなければ芽は出ません。

多くの先進的な組織では活発なブレイン・ストーミングが行われますが、その文化を取り入れるには、自社の根本的な風土改革も平行して行う必要があります。

否定的なマウントを取る人がいた場合、ブレストは即座に失速してしまうからです。

さらに言えば、変化の激しい時代において、改革を『自分ごと』にしてもらうためには、相応の仕掛けが要ります。

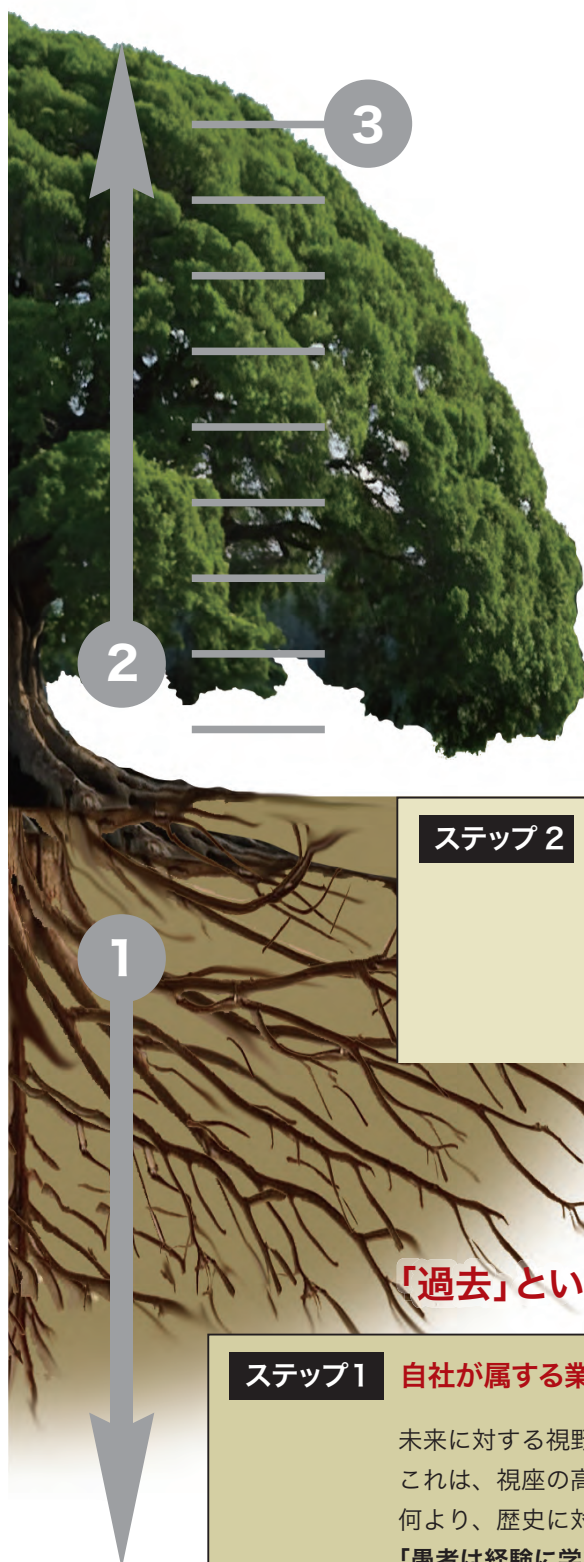
本企画の眼目である『メタ実践』は、サイニク理論の座学とベンチマークをベースとしつつ、上記の風土改革と『自分ごと』へのコミットを同時に行う施策です。



具体的には、セクション1で取り上げたサイニク理論の3つの特徴に対応するワークショップを想定しています。

- |                  |                                     |
|------------------|-------------------------------------|
| 1：独自視点による歴史研究    | ▶ <b>自社が属する業界の徹底した歴史研究</b>          |
| 2：歴史の周期性への着目     | ▶ <b>業界における周期性の発見と最新情報を踏まえた未来予測</b> |
| 3：未来予測への段階設定／活用法 | ▶ <b>未来予測に対する段階的な実行計画の立案と実施</b>     |

3つのステップを通じて達成されるイメージは『大樹深根』。  
木は、地上で見えている大きさと同じだけの根を見えない地中にはっていると言われます。  
根の深さ(=歴史への認識)と同じだけ幹(=未来への期待)は高くのび、根の豊かさだけ葉がしげる道理です。



## 高みに登れるはしごをかける

### ステップ3 未来予測に対する段階的な実行計画の立案と実施

長期的な未来予測からの逆算と現実的な活動計画の立案こそが重要です。計画の誠実な実現が未来を明るくものにします。

## 「未来」の空に高く幹をのぼす

### ステップ2 業界における周期性の発見と最新情報を加味した未来予測

周期性の利用は変化の察知であり、保守ではありません。むしろ最新情報だけを頼りにすることこそ、未知の選択を積み重ねる惰性的な活動です。両者の統合こそが理想。

## 「過去」という地に深く根をはる

### ステップ1 自社が属する業界の徹底した歴史研究

未来に対する視野の広さは、歴史に対する視野の広さに比例します。これは、視座の高さが時間の前後に対して同じように左右するからです。何より、歴史に対する知識は、判断に際して大きな自信になります。「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」からです。

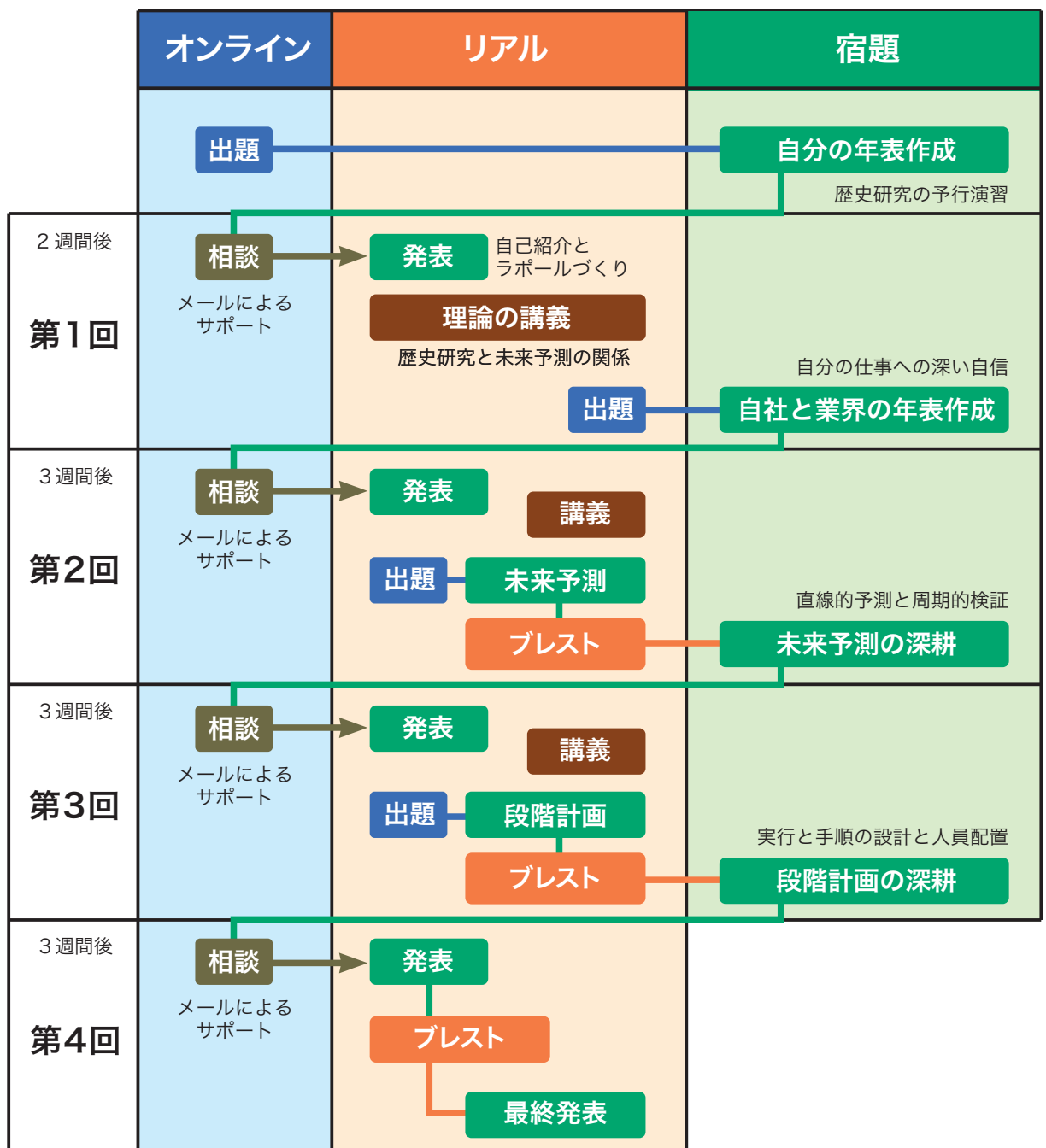


## 「メタ実践プログラム」のタイム・スケジュール

本企画は「自分で考える＝課題を自分ごとにする」ことに比重をかけていますが、複数人が集まる場所での内観は効率的ではありません。

自分一人で深く考える活動は「宿題」とし、ワークショップの場では「各自の発表」と「プレスト」を行ってもらいます。

以下は、経営者向け（各社一人ずつの参加）の進行表です。企業ごとの社内研修においては、人数や構成メンバーは変わりますが、進行自体は変わりません。



### 3 運営フロー

プロジェクトの運営フローは、ティール組織をイメージ・モデルにします。

『ティール組織』とは、フレデリック・ラルー氏が提唱した組織状態で、「**権力のあるリーダーが統率するのではなく、現場の従業員が思考し、意思決定する組織**」です。

かつての単一的な価値浸透時代のビジネスには、強いリーダーが求められました。

ラルー氏の理論で言えば、アンバー型の組織です。

もちろん今でも、一部の最先端技術の現場やユニークなプロダクトを提供する企業は、誰も真似のできない異能者・大天才によって牽引されることもあります。

アップルのスティーブ・ジョブズ氏などが好例です。

しかし、すべてのリーダーがジョブズのようなになれるわけではありませんし、多様化した時代においては、ジョブズ氏の後を継いでアップルを大きく飛躍させた、ティム・クック氏のような調整型のリーダーが求められます。

	特徴	メタファー
<b>Teal</b> ティール	<b>進化型組織</b>	<b>生態</b>
<b>Green</b> グリーン	<b>多元型組織</b>	<b>家族</b>
<b>Orange</b> オレンジ	<b>達成型組織</b>	<b>機械</b>
<b>Amber</b> アンバー	<b>順応型組織</b>	<b>軍隊</b>
<b>Red</b> レッド	<b>衝動型組織</b>	<b>オオカミの群れ</b>

【出所】：『ティール組織』フレデリック・ラルー 英治出版 2018年  
（原著：『Reinventing Organizations』Frederic Laloux Lightning Source Inc 2014年）を基にCHRI作成

本プロジェクトは、組織論自体にフォーカスしたものではありませんが、歴史観と未来観を同時に育むことで、結果的に有機的な組織の醸成にも寄与します。

以上のメタ実践プロジェクトを推進するには、異業種の経営者によるワークショップと自社メンバーによる社内研修の2段階での実施が効果的です。

というのも、発想を飛躍させるためには立場に遠慮のないブレストが重要ですが、一方で、飛躍した発想を理解するには経営者自身もそれに取り組んでおくべきだからです。つまり、リーダーの深い理解とメンバーの積極的な活動による2段階の全体が、『プロジェクト』になります。

以下、座学からメンバー主体のメタ実践までの開催イメージの概要です。

No.	項目	内容	時間・期間	人数目安
1	経営者向け メタ実践講座	自社での展開を準備するための講座です。サイニック理論の要点を深く理解しつつ、自社における展開の筋道を学んでいただきます。	6時間／1回 4回：約3カ月	8人
2	メンバー向け メタ実践研修	この企画の本丸です。自社内での展開については、講座を受講した経営者本人が行う場合と講師に依頼する場合が想定されます。	6時間／1回 4回：約3カ月	3～24人 (一応の目安)

## ご相談

各項目に関するご質問やご相談は、以下のフォームからお願いします。  
スギオカのメールアドレスをご存じの場合は、そちらでも OK です。

<https://aoimachi.biz/question/>



以上